

園内の探索：パート1

コミュニティ広場、教材園、花影の池

コミュニティ広場

みずの森の園内ツアーは、通常ロータス館前のコミュニティ広場から始まります。季節の花々が鉢植えやハンギングバスケットで広場を彩ります。これらの花は、5月のデルフィニウムから、11月の懸崖菊、そして12月には冷蔵球根から育てられた「アイスチューリップ」まで多岐にわたります。夏の間は、噴水の周りにハスの鉢植えが配置されます。また、ヒツジグサ (*Nymphaea tetragona*) と熱帯スイレンを目玉とするエリアもあり、これらは花の香りを楽しむことができるよう配置されています。夏の訪問者は、片側が黄色で反対側が赤い二色の花をつけるワンピサを見ることができるかもしれません。

教材園

教材園では、長さ約20メートル、幅2メートルの人工的な高床の池2つにハスが配置されています。ハスは3月に植えられ、7月に開花します。その中には、古植物学者の大賀一郎博士 (1883-1965) が1951年に東京に近い千葉で発見した2,000年前の種子を発芽させて作り出した深紅の花、大賀ハスも含まれています。ハスが人の背丈ほどの高さまで育

つため、この庭園は写真家に特に人気があります；午後には花が閉じ始めることから写真を撮る人々は早朝に訪れます。

花影の池

このスイレンの池は、みずの森の目玉展示です。フランスの印象派画家クロード・モネ（1840-1926）のジヴェルニーの庭園からインスピレーションを得た花影の池は、スイレンや他の水生

植物に、絵のように美しい石橋や木橋を背景として組み合わせています。この池には温帯性と熱帯性の両方のスイレンが 50 種類あり、6 月から 9 月の間、いつでも開花を見ることができます。中でも最も印象的なのはパラグアイオニバス（*Victoria cruziana*）です。その葉は、特徴的な上向きの縁とトゲのある裏面を持ち、幅 1.5 メートルにまで成長します（8 月には、子どもたちがその葉の上に座ったり立ったりすることができます）。池にはほかにも、古代エジプト人が紙を作るのに使用したパピルスや水生カンナなどの植物も植えられています